

第一回全国優勝野球大会 秋田中学出場までの足取り

◆それは大阪朝日新聞の社告から始まった

第一回全国中等学校野球大会開催の社告は大正4年(1915年)7月2日付の第一面に発表された。会場は大阪の豊中とある【コピー参照】。その後、大会期間は8月18日から5日間との社告が出された。開催を決めてから約2ヶ月後という短期間で大会。代表決定への予選方法も統一されたものがなかったため、東北の代表校決定にも混乱があった。

◆秋田中学が代表に

秋田中学が東北を代表して出場したことについては、かねてから異論があり、「あれは秋田中学の陰謀だ」と誇る向きもある(『岩手県高等学校野球連盟20周年記念誌』)。そこで、代表に至る経緯の概要を辿ってみると以下のようである。

主体	概要	備考
1.朝日の社告	・年1回本社が別に定むる所に依りて参加校を選定し、阪地に於いて優勝試合を行う。 ・本社の認めたる地方野球大会の最優勝校に限る。(大正四年度実施の大会に限定)	朝日新聞から秋田中に連絡が入る
2.秋田中学の対応	・朝日新聞からの東北球界への連絡は秋田中学宛でのみ。 ・認めたる地方大会=秋田県予選、その代表として招聘されたとの受け止め。 ・連絡受信後、大会開始までの間に東北予選を行うことは時間的に不可能。	秋田中では大会参加の意向を確認し合う
3.朝日の指示	・秋田中学に対戦成績の送付を指示。	この年の秋田中は公式試合、未だ無し
4.他校の動き	・横手中、秋田農(現在の犬曲農)が参加を希望 ・大館中は部員不足、本荘中は力の差を考慮し不参加	秋田中は対2校との試合結果が送付資料に叶うと判断
5.予選の開催	・東北大会(7月27日・28日:大曲町) 1回戦 ○秋田中18-5横手中● 決勝 ○秋田中23-0秋田農●	朝日新聞発行の全国大会70年史には「秋田農のメンバーと両チームのトータル記録不明」とある

全国大会出場校10チームの予選記録

地区名	参加校	予選校数	予選期間	会場	決勝戦のスコア	備考
東北	秋田中	3	7月27・28日	大曲町	○秋田中23-0大曲農●	
東京	早稲田実	8	3月27日~29日	早大	○早稲田実8-5荏原中●	3月の都下大会の記録
東海	山田中	6	8月11日~13日	富田中	○山田中5-4愛知四中●	
京津	京都二中	10	7月25日~29日	三高	○京都二中5-0同志社中●	
関西	和歌山中	8	8月7日~13日	豊中	○和歌山中2-1市岡中●	
兵庫	神戸二中	7	8月3日~7日	関西学院	○神戸二中3-2関西学院●	
山陽	広島中	6	8月6日~8日	広島高師	○広島中3-1広島商●	
山陰	鳥取中	6	8月3日~15日	米子中・杵築中・豊中	○鳥取中5-2杵築中●	鳥取、島根予選・2次予選
四国	高松中	11	8月1日~8日	徳島中・香川商	高松中11-11香川商	徳島・2次予選
九州	久留米商	8	7月31日~8月1日	福岡商	久留米商(棄権)豊國中	
10地区	計	73	注:①四国は香川商投手疲労のため、棄権。②九州は豊國中、1日3試合目にあたり疲労のため、棄権			

朝日新聞社が東北の地方大会を秋田県予選と指定した理由(推測)

【前年(大正三年)に行われた「東都遠征」の成績が大きく影響しているものと思われる。(『翔球 秋田県高等学校野球連盟』)

試合 対戦スコア(『秋田高野球史』より)	スコア異説	備考
1 ○秋田中12-0福島中●	(『翔球』では13-0)	・ユニフォームは白地に胸にYADOMEのローマ字のついたものを新調し、他流試合をしに出かけた。 ・横浜商との対戦では相手のめぐるしいバント戦法にすっかり内野陣がかく乱された。当時、秋田中はまだバント戦法などという技術は身につけていないときで、その近代野球に目を見張った。 ・この遠征における好成績が翌年の大会出場に繋がったといえよう。
2 △秋田中6-6宇都宮中△	(『翔球』では5-5)	
3 ○秋田中4-2日本中●		
4 ○秋田中9-1荏原中●		
5 ●秋田中2-6横浜商○	(『翔球』では2-5)	
6 ○秋田中10-9早稲田中●	(『翔球』では9-8)	
7 ●秋田中0-10慶應普通○		
8 ○秋田中5-1土浦中●		
9 ○秋田中2-0仙台一中●		
10 ○秋田中5-1相馬中●		

大正三年の東都遠征メンバー

投手 八代 賢次郎	二塁手 小山田 義孝	左翼手 小山田 推一	補欠 丹市郎
捕手 信太 貞	三塁手 長崎 廣	中堅手 羽石 統一	(マネージャー)
一塁手 渡部 純司	遊撃手 内藤 賢蔵	右翼手 鈴木 久米治	大井 直之助

第一回全国優勝野球大会 秋田中学いざ豊中へ～そして準優勝に

月 日	大正四年7月28日～8月24日 秋田中学の動き	備考
7 28	朝日新聞社に横手・秋田農に大勝の報告	・選手が土壇場になって揃わず急遽、学校内から急造選手を仕立て秋田を出発。当時は”球ころがし”程度の認識。大阪まで大金をかけて遊びに行くとは何事だとの猛反対もあり
7 29	慶應大学の投手石川真良、一塁手富樫与一を招じて、卒業生と監督の下、酷熱炎暑と戦いつつ以降十日間の猛練習を開始	
7 30	朝日新聞社より、電報にて参加許可の連絡	
8 12	秋田駅を出発	・駅頭での壮行会の人数もまばら
8 14	三十五時間かけて、朝大阪着。金龍館に投宿	
8 17	大会前夜、川風そよぐ大阪堂島川のほり大阪ホテルでの選手茶話会に全国から集まった球児十校百十人が出席	・噂では早稲田実業が最も有望との評
8 18	十校が堂々と入場行進。秋田中は胸にYADOMEのマークをつけた真っ白なユニフォーム。観衆は1万人で収容し切れず、朝日新聞社は嬉しい悲鳴。朝日の村山社長の始球式で開幕	・大阪府下豊能郡豊中球場 ・秋田中は明日に備え、ゆっくりと観戦
8 19	初戦、山田中に9対1というスコアで大勝	・”番狂わせ”の声が大きい
8 20	優勝候補の早稲田実業に3対1で勝利	・準優勝以上が確定
8 22	雨のため、順延	
8 23	延長13回、京都二中に1対2でサヨナラ負け	・13回裏一死三塁の場面～ 「打者がセカンドフライをあげた。二塁手斎藤はトリックプレーのワンバウンド飛球をとって一塁で打者を刺したが、それを見た三塁走者がホームへ走り、一塁手信太が慌てて捕手へ転送したが間一髪間に合わず、これが決勝点になった」
8 24	梅田駅午後八時二十五分発の列車で帰途につく。プラットホームでは”秋田中学万歳！”の声	

関係した人びと

監督・教諭 小室理吉のこと

小室理吉氏(明治39年4月―大正15年4月)を”ヤマグボ”と呼ぶようになったのは氏の顔が三角形であるうえ、オニのように怖かったため、節足動物の”ヤマオニグモ”に例えられたものである。

とにかくこの先生に愛情のピンタをくわされない生徒は稀であったといわれるぐらいだ。

【注】小室氏は大正三年の東都遠征、そして翌年の全国大会に監督・引率教諭として秋田中学を率いた。

一塁手 信太貞選手と作家阿部牧郎のこと

一塁手信太貞は大会後その優れた技量・態度を評価され、現在で云うベストナインに選ばれている。

この信太選手は、作家阿部牧郎の伯父にあたる。阿部は野球小説を書かせたら当代随一の腕前、中でも『ドン・キホーテ軍団』はその最高傑作。

阿部自身も秋田に疎開。その後、花輪高校時代に左打ちの一塁手として予選に出場している。

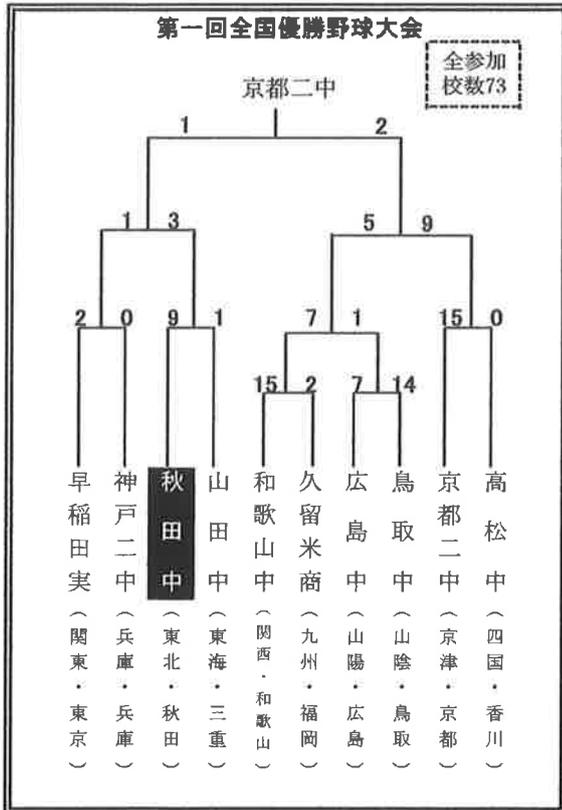
虫明重呂無の現地ルポのこと

作新学院の怪物江川卓人氣に沸いた昭和48年(1973年)の第55回大会の『週刊朝日増刊号 栄冠めざす48校の布陣と戦力』に、「現地ルポ 第一回大会ベスト2(京都二中 秋田中)の球史にみる明暗」という特集記事が掲載された。書き手は当時最高のスポーツライター虫明重呂無。

この時、秋田高校は学校創立百周年を迎えていた。

詳細は同誌の【コピーを参照】。

第一回全国優勝野球大会 秋田中学熱闘の跡



大会参加出場選手・監督

監督	小室 理吉
引率教諭	
投手	長崎 廣司
捕手	渡部 純
一塁手	信太 長治
二塁手	斎藤 久半
三塁手	鈴木 推一
遊撃手	小山田 統市
左翼手	羽石 新吉
中堅手	丹 市郎
右翼手	野口 常吉
補欠	欠 井橋
補欠	欠 高橋

宿舎

梅田駅前金龍館本

1915年(大正四年)

大正4年(1915年)7月2日付け『大阪朝日新聞』の第1面社告により、この第一回大会は始まった

- 大会事始め
- ・野球規則11カ条の制定
 - ・本塁を挟んでの整列と礼の挨拶
 - ・優勝チームには優勝旗、銀メダルの授与。副賞にスタンダード大辞典と五十円の図書券。選手に腕時計
 - ・準優勝チームには英和中辞典・初戦勝利チームには万年筆
 - ・全選手に参加章の銅メダル授与

栄光の準優勝までの熱闘全3試合

月日	球場	回戦	校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計	バッテリー
8 19	豊中	準々決勝	○秋田中	1	0	2	3	0	0	2	0	1	9	○長崎一渡部
			●山田中	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	●西川一置塩
			秋田中	打	安	失		山田中	打	安	失			
1	捕手	渡部	4	2	1	1	捕手(武)	3	0	0				・三塁打 渡部
2	投手	長崎	3	0	0	2	一塁	置塩	3	0	1			・二塁打 沢山
3	三塁	鈴木	5	2	0	3	投手	西川	4	0	1			・妨害出塁 菊川(武)[渡部]
4	遊撃	小山田	4	1	0	4	遊撃	沢山	4	2	1			【渡部の長打について朝日新聞は三塁打と記録】
5	一塁	信太	5	1	0	5	左翼	堤	3	1	0			長崎投手の変化球は予想以上の出来を示し、三振12を奪い、守備も好プレーを演じた。打っては丹が三塁打、捕手の渡部が二塁打をそれぞれ放った。その結果は9対1というスコアで大勝した。【注】
6	左翼	羽石	4	0	0	6	三塁	前納	4	0	3			①『秋田高校野球史』より。②丹の三塁打の記録は朝日新聞には無し。③山田中学=現「宇治山田高校」(三重県)
7	中堅	丹	3	1	0	7	中堅	田中	3	0	0			
8	右翼	野口	2	0	0	8	右翼	菊川	2	0	0			
9	二塁	斎藤	3	1	0	9	二塁	鷹森	3	0	2			
振	四	儀	盗	33	8	1	振	四	儀	盗	29	3	8	
9	5	3	3				9	5	3	3				

【『東京朝日新聞復刻版』:大正4年8月20日付け記事を転記(句読点が無い為、読み易いよう補正・挿入)。】

全国野球大会第二日。午後一時、秋田中学対山田中学試合開始。

秋田勢先攻。小山田のヒットと三塁手の過失と相俟ってマンマと一点を収め、二回目、事無く。

三回目、渡部のヒットに秋田勢一点を加え、勢いに乗じたる。長崎の犠牲球、効を奏して更に一点を合わせたるが、山田方三振相次いで敵投手の為に打撃を封ぜられて収獲無く。

四回目、大いに攻勢を取りたる秋田勢の一死満塁にあたり死球によって一点。及び信太の安打に送られ二点。都合三点を加えて六対零となり。この形勢に激したる山田方は努力猛打第三塁を踏みし、遂に生還を得ず。

五回目、両軍得る所なく。

六回目、秋田勢は丹、中堅越三塁打に出でたるも野口の軟打効無くて結局得点なく。山田方をして頹勢を盛り返すの機、漸く至れりと為し、既に味方二死後に出でたる沢山の美事なるヒット、卓効を奏して最初の一点を入れる。

七回目、信太熱球を二塁手の逸したるに乗じて秋田勢二点を加え然も山田方は本塁に併死して回天の業、ともしれば難からんとす。

八回目、敵の守備、厳にして流石の秋田勢も入るに由なく。山田方また同じく一塁に討ち死し、斯くて最終の九回目に入る。勝ちに乗じたる秋田勢またしても満塁となれる折柄、捕手の投球を本塁手逸して生還一人を救え、代わりて攻むる山田方最後の念晴らしに腕の限り、根限り打ち捲らんと力みたるも効無く遂に得点を得ず、一対九を以て秋田軍勢の勝利となれり。二十日は第一回鳥取中学対和歌山中学、第二回早稲田実業対秋田中学の優勝試合を為すべし。(大阪電話)

【『東京朝日新聞復刻版』:大正4年8月24日付けの記事を再生(句読点が無い為、読み易いよう補正・挿入)。】

最優勝戦、京都二中对秋田中学

秋田中学は去る二十日の試合に於いて強敵早稲田実業を撃破せし以来二日間の休業を得て十二分の英気を養い、京都二中は前後二日に互る和歌山中学との激戦に疲労せる気味あるも、ほかならぬ最優勝戦の事とて決死の勇を奮って起ち、満場の拍手に迎えられつつ、午後二時四十分、秋田の先攻を以って開始す。

テーブルスコアによる決勝戦の再現

◇大正4年(1915年)8月23日 豊中グラウンド ◇開始14時40分

秋田中	打	得	安	失	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 捕手 渡部	5	0	1	0	投ゴ			三ゴ		投ゴ		左2③		左飛			
2 投手 長崎	5	0	1	1	一ゴ			右安②		投ゴ		投ゴ		三振			
3 三塁 鈴木	5	0	0	2	三振			三振		三振		中飛		二ゴ			
4 遊撃 小山田	4	0	0	1		三振		四球		三振		投ゴ		一飛			
5 一塁 信太	5	1	0	2		三邪		投ゴ				投失		投ゴ		三振	
6 左翼 丹	5	0	2	0		二ゴ			二飛		?	安		二ゴ		左安④	
7 中堅 羽石	5	0	0	1			二ゴ		遊飛		二ゴ			投ゴ		左飛	
8 右翼 高橋	5	0	0	0			投ゴ		投ゴ					二ゴ		三振	
9 二塁 齋藤	4	0	0	0				右ゴ①		投ゴ		三振				三振	
計	43	1	4	7													

摘要
 ①二塁ゴロを逸すも右翼手前進し、一塁に刺す
 ②打者鈴木のとときに二盗成功
 ③打者長崎のとときに投手牽制球の逸球を得て三盗
 ④打者高橋のとときに二盗成らず

(四死球)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
(安打)	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4
● 京都二中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
(四死球)	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	4	
(安打)	0	0	0	2	1	0	2	0	0	1	1	0	1	1	0	0	7	

球審 菊名
 塁審 井上
 塁審 岡本
 審判 町田

二塁打 渡部

京都二中	打	得	安	失	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 中堅 中	5	1	1	0	遊ゴ			?	安	右飛		四球		二飛		中飛	
2 捕手 山田	5	0	1	0	一飛			?	犠	三振		投失⑤⑥		?	安	遊失	
3 投手 藤田	6	0	2	1	三振			二安	②③	遊ゴ		三振		中安		投ゴ	
4 三塁 大場	6	1	0	0		?	飛	三振		左飛		?		三振		中失⑥	
5 遊撃 綾木	6	0	0	0		三失①		三失		三ゴ		中飛		?		?	邪⑦
6 二塁 津田	6	0	0	1		三振		三振		遊飛		投ゴ		投ゴ		二ゴ⑦	
7 一塁 西川	3	0	1	0			三振		?	邪		右安		四球		四球	
8 左翼 内藤	5	0	2	0			遊ゴ		左安		左安		投ゴ		左飛		
9 右翼 野上	4	0	0	0			三振		四球		三ゴ			三振		三直	
計	46	2	7	2													

摘要
 ①打者津田のとときに投手牽制球を一塁手逸し二盗も、離塁で牽制死
 ②打者大場のときに二盗
 ③打者大場とのエンドラン失敗。三塁走者中は本塁憤死
 ④投前バントの悪投で、走者二、三塁⑤投手悪投で中生還。⑥打者藤田とのエンドラン失敗で、三本間に挟殺
 ⑦打者綾木のとときに二盗
 ⑧二ゴを一塁手ファンブルする間に大場生還。サヨナラ

投手	回数	打者	安打	三振	四球	失点	三振	四球	犠打	盗塁	失策	
● 長崎	12 1/3	51	7	10	4	2	秋田中	10	1	0	1	7
○ 藤田	13	44	4	10	1	1	京都二中	10	4	1	5	2

【注】打球の結果に不詳部分、失策数に不符合あり

【大阪朝日新聞:大正4年8月24日付けの記事を再生(句読点が無い為、読み易いよう補正・挿入)。】

秋田、功急ぎ失敗 京二の打棒に屈す

【評】善戦9、尚勝敗の決を見るに至らず、遂に13回に至るまでエキストラニングを行いて漸く2-1の勝負を見るに至りしは、流石に全国を代表する大会の最優勝戦たるに恥じず。勝ちたる二中は勿論、敗れたる秋田も亦良く戦いたり云う可し。京都二中は惨澹たる苦心を重ねて敵の投球に対する打撃法を研究すると共に、従来十字投球の直球のみ打ち馴れて、カーブに対する打撃法の修練なき敵打者の弱点を巧く看破し、藤田の怪腕を利用して悉くアウトカーブに封じ去り、且つ最初より勝敗を度外に置いて慌てず騒がず、始終慎重の態度を執りつつ敵を圧迫し、試合の2、3回頃より既に優勢の地位に立ち、最後の勝利を予想せしめた。総体の上より見る時は、秋田の捕手を除く外、守備に於いて二中に優りしも打撃に於いてそれ以上に劣りしたため、此の敗戦を見るに至りしものなるが、概して両軍とも打撃の際、焦慮り気味なり。殊に9回以後に於いては一層焦燥してバントを利用することを忘れ、みすみす好機を逸し去りたり。

京二中はヒットエンドランのサインの錯誤かそれとも走者の軽挙か、2回までも一死にして三塁に走者を有しながら本塁に憤死せしめて毎次好機を逸し、9回にて終る可き勝負を延長するに至らしめたり。また秋田の得し1点は、当然京軍の捕手によりて一塁に投ずる可きバントを茫然として投手に任せし為め、藤田稍狼狽して一塁に悪投し、可惜1点を敵に与えしものにして、また京二中が第8回に得し1点も、秋田の捕手が敏捷を欠き、優に捉え得可き高球を逸して中を生還せしむるに至りしものなり。其の他、秋田の一塁手信太及び左翼手丹、京軍の投手藤田、左翼手内藤等は皆よく活躍せしが、殊に京軍の8番打者たる内藤の打撃大いに振るいしは、敵投手を困惑せしむる第一の因となりて大功を奏した。要するに、此の日の勝負は順当の勝負にして、あれ迄に試合を延長せしめしは寧ろ秋田の善戦せるものと云う可し。(小西作太郎委員)

【注】この戦評は、京都二中から三高に在学、大会委員を務めた山中作太郎(のちの朝日新聞取締役)の筆になるものである。『秋田高校野球史』より。

月日	球場	回戦	校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計	バッテリー
8 20	豊中	準決勝戦	● 早稲田実業 ○ 秋田中	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	● 白井一岡田 ○ 長崎一渡部

早稲田実業				秋田中			
	打	安	失		打	安	失
1 捕手 岡田	2	0	0	1 捕手 渡部	3	1	0
2 二塁 三川	3	0	1	2 投手 長崎	4	0	0
3 投手 白井	3	0	2	3 三塁 鈴木	4	2	0
4 左翼 石崎	3	0	0	4 遊撃 小山田	4	1	1
5 右翼 霜島	3	1	0	5 一塁 信太	4	1	0
6 遊撃 石井	2	1	2	6 左翼 丹	3	0	0
7 中堅 中沢	3	1	0	7 中堅 羽石	2	0	0
8 一塁 平田	3	0	1	8 右翼 高橋	3	0	0
9 三塁 宮川	3	1	0	9 二塁 斎藤	3	0	2
振四犠盗	25	4	6	振四犠盗	30	5	3
1 6 5 6				8 0 3 0			

早稲田実業は優勝候補で、白井一岡田のバッテリーはなかなか秋田中を寄せつけなかったが、秋田中は白井のインコーナー寄りの速球をたくみに合わせ、一、三、八回にそれぞれ一点を加え計三点をあげた。幸い味方の長崎の右腕も衰えを知らず、コーナー・コーナーを衝いて、はやる早実打線をかかわした。結局一点を許しただけで、3対1と準優勝をものにして決勝へコマを進めた。【注】①『秋田高校野球史』より。②早実の岡田＝岡田源三郎：明大→金鯱。野球殿堂入り。）

【『東京朝日新聞復刻版』：大正4年8月21日付けの記事を再生(句読点が無い為、読み易いよう補正・挿入)。】
 全国野球大会第三日。午前引続き午後二時より開始せる一勝者試合の第二回目は小早慶試合の称ある早稲田対秋田の試合にして観衆の期待また甚だ大なりき。
 一回目、先攻の早稲田方の打者岡田、熱球を飛ばして出で、巧に本塁に迫りしも、後援続かずして倒れる。秋田方二死後、小山田の小ゴロを折角止めた敵投手、悪球を一塁に投じたる為、二塁走者疾駆生還して最初の一点を収める。
 二回目、早稲田方、敵の四球に送られて二塁を踏みしも入らず。秋田方、また三人相次いで悶死。
 三回目、早稲田方、岡田四球に出でて二死後三塁に機を窺がいし、白井の飛球、三塁手の得るところとなりて生還せず。秋田方斎藤敵遊撃の失に出で二塁に到れる時し、渡部の軟打を遊撃得たるも三塁に悪球を投げ生還一人を加えて得点二となる。
 四回目、早稲田方凡打して効なく、代わりて秋田方小山田安打に出でしも返らず。
 五回目、早稲田一死後、宮川ヒット、岡田四球に出でたるも三川、白井連死して得るところなく、秋田方また得点なく。
 六回目、早稲田方石崎四球に出で霜島も犠牲球に送られ、石川の右翼ヒットによる一点を入れて敵の守備漸く乱れかけしが辛くも防ぎ止めて事なく、秋田方凡打凡死して局面変化なく。
 七回目、早稲田総て効無く。秋田方二死後、三塁を踏みしも高橋直球三塁手に捕らえられて進むあた能わず。
 八回目、早稲田方、回天の業この機にありと為し、攻撃すこぶる努めしも敵の緊密なる備えは容易に襲破を許さずして三人連死。秋田方は既に一点の勝越しあり、あわよくばプラスアルハーと為さんとし、二死後鈴木三塁越安打に依りて三塁を占めたる長崎は小山田の球を投手の逸したるに乘じ、馳走本塁に入りてここに一对三となる。
 九回目、早稲田方回復の機はこの一回に極まる。しかも二死既に眼前に在り走者三塁に入りて敵の牙宮を窺うも宮川の飛球、三塁の得るところとなりて惜しむべし三塁に死し、結局一对三プラスアルハーにて秋田勢の巧妙を為すに至れり。
 三時十五分終了。
 【注】①『秋田高校野球史』より。②小早慶試合とは……：大会一の呼び物であったこの試合、早稲田実業は早大直参のチーム、秋田中は多年慶應のコーチを受けたチームであることから、こう呼ばれた。

月日	球場	回戦	校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	計	バッテリー
8 23	豊中	決勝戦	● 秋田中 ○ 京都二中	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	● 長崎一渡部 ○ 藤田一山田

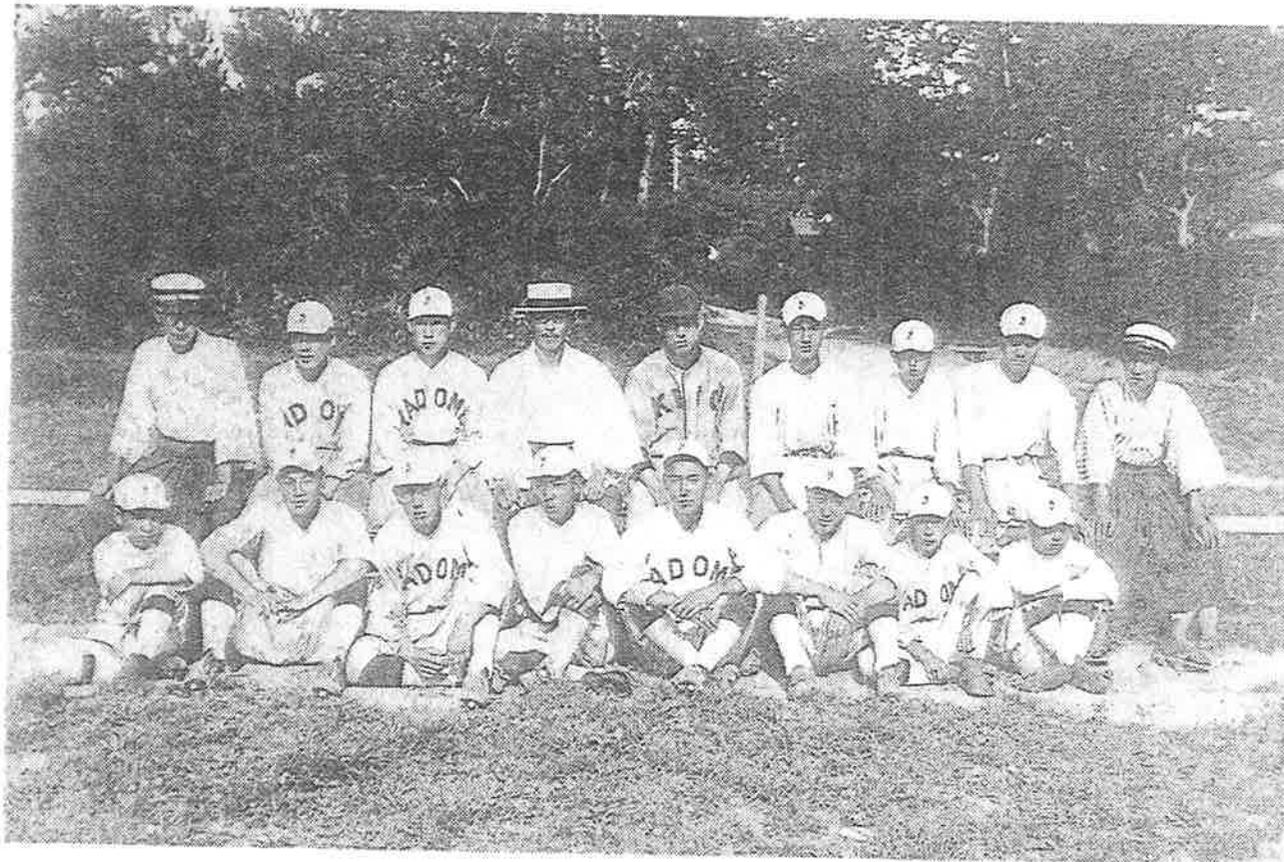
秋田中				京都二中			
	打	安	失		打	安	失
1 捕手 渡部	5	1	0	1 中堅 中	5	1	0
2 投手 長崎	5	1	1	2 捕手 山田	5	1	0
3 三塁 鈴木	5	0	2	3 投手 藤田	6	2	1
4 遊撃 小山田	4	0	1	4 三塁 大場	6	0	0
5 一塁 信太	5	0	2	5 遊撃 綾木	6	0	0
6 左翼 丹	5	2	0	6 二塁 津川	6	0	1
7 中堅 羽石	5	0	1	7 一塁 西川	3	1	0
8 右翼 高橋	5	0	0	8 左翼 内藤	5	2	0
9 二塁 斎藤	4	0	0	9 右翼 野上	4	0	0
振四犠盗	43	4	7	振四犠盗	46	7	2
10 1 0 1				10 4 1 5			

・二塁打 渡部・暴投 長崎
 今日大会の選手権を決定すべき二十三日は愈々来たれり。夜来降雨ありてグラウンド濡れるため、予定の午後一時に開始する能わず。委員協議の上、予定より一時間延ばして午後二時より挙行することに決し、両軍選手シートノックを終わりにして試合を開始せんとした。またまた小雨あり。一時全く中止するの已むなきを氣遣わしめしが、幸いにして程なく西北の一角より密雲切れ始め、降雨全く止みたるを以て更に一応の協議を重ねたる上、最優勝戦を執行したり。(試合開始までの状況)

【『東京朝日新聞復刻版』：大正4年8月24日付けの記事を再生(句読点が無い為、読み易いよう補正・挿入)。】
 京都二中勝つ ▽十四回の奮戦 ▽京都2秋田1
 大阪朝日主催全国中学優勝試合最後の決勝たる秋田対京都二中野球戦は昨日午後二時より開始したるが互いに相伯仲し、第六回の終わりに至る迄両軍とも無得点の儘にて試合を継続。
 第七回、秋田軍一点を占め、第八回には京都二中一点を占めて同点となり、九回に入るも勝負つかず。
 十回も双方無得点にて十一回に入りしも尚勝負決せず。
 十二、十三勝負決せず終に十四回目、京都一点を占め二対一にて京都の勝ち。【注：延長14回は誤りで、正しくは13回で決着。】

小室理吉氏のおもかげ

(鎌田明德氏の母方の祖父)



大正八年のチーム 上段右から 西野忠男 今剛三 中村讓
佐野貫一 大川竹二 小室理吉 大島長三郎 中村四万吉
下段右から 小川司 三浦次郎 蓼沼三郎 築地俊竜 介川
武夫 渡部士郎 渡部進 伊藤勝三